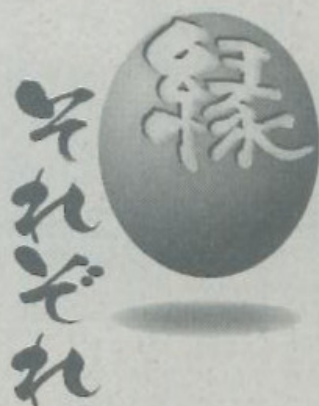


遺品整理会社社長

よしだ 吉田 太一さん

44



### 寄り添う人④

遺品整理の仕事が始めて6年。1万件近く依頼を受けていますが、9割は一人暮らしで、うち6〜7割は誰にも看取られずに亡くなっています。

### 「感謝」に迷い消え

28歳の時、軽トラック1台で引越し運送業を始めました。「遺品をどうしよう」という相

悩みに答えをくれたのは、依頼してきた遺族でした。核家族化が進み、「離れて暮らしている」ので、遺品整理の時間がとれない」と言う人がいます。孤独死の現場は異臭が立ちこめ、遺族が部屋に入れないことも。私たちは依頼を断ることはありません。そんな人たちの「ありがとう」という感謝の言葉に、迷いは使命感になりました。

### 遺品のメッセージ

同時に「孤独死をなくしたい」

50〜60歳代の男性の孤独死が増えています。熟年離婚やリストラで一人になり、家族も友達もいない。仕事もお金もない。部屋には弁当の容器がごみとなつて山積みになり、冷蔵庫の食品は賞味期限切れ、敷きっぱなしの布団は真っ黒……。

ある男性宅では、テーブルの上に子どもと奥さんと思われる写真がありました。ごみに囲まれていながら、かつての家族を眺めていたんでしょうか。

こうした人たちは、人とのつながりが切れ、社会から忘れられた存在になってしまっているのではないか。もし亡くなる時、たまたまそばに誰かがいたとしても、それが孤独死なんだと思います。

## 本当の一人にならなないで

談を受け、引き取って処分などするうち、これは必要な仕事だと思ひ、2002年から専門化しました。でも、最初の3年間は悩みました。遺品整理は本来、身内がするもの。自分のやっていることは家族間、地域間の断絶に拍車をかけるのではないかと。

という思いが強くなりました。自分の生き方を見直し、人のかかわりを思い返してもらっためにエンディングノートを作り、インターネット上の私の「現実ブログ」を通じて無料配布しています。悲惨な現場を見てきたからこそ、伝えたいことがあります。本

当の一人にはならないでほしい。自分が死んだ後、1、2日間に「あの人、どうしたんやろう」と気づいてくれる人とのつながりを持っていてほしい。孤独死予備軍へのメッセージです。無造作にハンガーに掛けられた喪服はほこりまみれで、人との交流がなく、着る機会がなかったと、孤独の深さを感じました。一方で複数の着信記録が残る携帯電話に、一人じゃなかったんだとほっとしました。遺品は人の生き様を間近に見てきた。自分はどうな死に方をするのか、心配する人もいるでしょう。でも、人とのつながりを大切に生きていけばいい。どう生きるかが大切なんだ。遺品が教えてくれました。

(終わり)

「縁それぞれ 寄り添う人」へのご意見、感想をお寄せ下さい。手紙(〒530・8551読売新聞大阪本社生活情報部「縁それぞれ」係)かファクス(06・6365・7521)、メール(seikatsu@yomiuri.com) お願いします。

「人とのつながりを持ちながら生きることの大切さを、遺品が教えてくれました」と話す吉田さん(東京都大田区のキーパーズ東京支店で)



遺品整理とは 亡くなった方の部屋の家財道具、布団などの処分や清掃、形見分けの配送、人形などの供養までを、一括で引き受ける。吉田さんが設立した会社「キーパーズ」(本社・愛知県刈谷市)は遺品整理専門としては日本初。東京、大阪などに4支店を持つ。同様のサービスを提供する業者は増えている。